

ホムンクルスの秘密
——ゲーテ『ファウスト』第二部第二幕

時 田 郁 子

1 人間を造る夢

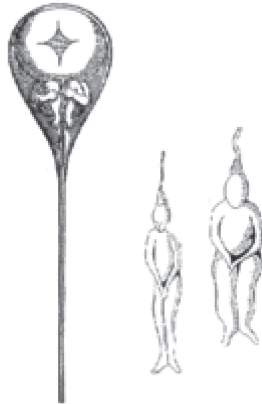
人間の成立に関する神話は世界各地にある。ヨーロッパに限定すると、創世記では神が塵を捏ねたものに息を吹き込んでアダムを作り（創世記 2-7）、ギリシア文化圏ではプロメテウスが粘土と水で人間の男女を作っており（オウィディウス『変身物語』第一章⁽¹⁾）、どちらの場合も神が自らに似せて人間を形作った。これらの神話で人間は技術を用いて造られるが、果たしてそのようなことは神にのみ可能なのか。それとも人間にも可能なのか。

人間が技術によって人間を造るという夢は古来語り継がれてきた。ギリシア神話ではピュグマリオンが自作の彫像の乙女に恋をし、女神ウエヌスの計らいで乙女は人間になり、二人は子供も設けたという⁽²⁾。ユダヤ教にも人造人間ゴーレムの伝説がある。16-17 世紀にかけてプラハに実在したラビ・レーヴが粘土と言葉からゴーレムを造ったが、次第にゴーレムは制御不能になり、ラビはゴーレムの額に記された「真理 (emèth あるいは Emmès)」という語の最初の「e」を消し、つまり「死 (mèth あるいは mès)」を宣告して、粘土の塊に戻したという⁽³⁾。これら土に由来する人造人間に加えて、13 世紀のスコラ学者たち、アルベルトゥス・マグヌス（1200 年頃 - 1280 年）やロジャー・ベーコン（1219-1292 年）がそれぞれ機械仕掛けで動く人形⁽⁴⁾を作り出して以降、機械 = 人間はロボットや人工知能の開発へ続く。また有機物を材料にした人造人間は 16 世紀の医者パラケルススを経て 21 世紀の再生医学に繋がっていく。このように人造人間を夢見る想像力は科学的・技術的進歩と軌を一にしてきた。文学と科学の連携は 19 世紀のドイツ語圏において顕著であり、本稿では、ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832 年）が『ファウスト』第二部（1833 年）⁽⁵⁾で造形したホムンクルスに着目し、伝統的

ホムンクルス観を踏まえて、ゲーテのホムンクルスの特殊性を指摘し、ゲーテの想像力の広がり进行を明らかにする。

2 精子の小人

「ホムンクルス (Homunculus)」はラテン語の「人間 (Homo)」の縮小語で「小さな人間」を意味する。この語は発生学において精子とほぼ同一のものとして用いられた。生物の発生に関して主に二つの説、前成説と後成説がある。前成説は、成体の原型が卵子、精子あるいは受精卵の中に予め出来上がっているとする説で、そのなかでも卵子に原型を見るものを卵原説、精子に原型を見るものを精原説と言う。前成説は17世紀から19世紀にかけて隆盛を極めたが、それは17世紀に顕微鏡による観察が始まったことに関係する。その成果の一つに、オランダの学者ニコラス・ハルトゼーガー (1656-1725年) が顕微鏡を通して精子の頭部にいる小人を発見したと考えたことが挙げられる。



ハルトゼーガー『屈折光学』(1694年)より

この絵は、ハルトゼーガーが描写した精子の図であり、精子の頭部に大人のミニチュアのような小人が座っているため、前成説の中でも成体の原型が精子にあるという精原説を裏付けるとされた。しかしながら 19 世紀にヒドラの再生や奇形などの比較研究が進むと、発生過程が進むにつれて諸器官が形成されて成体が出来上がるとする後成説が前成説に取って替わり⁽⁶⁾、前成説を誤謬と見なす立場から精子の小人はホムンクルスと揶揄的に呼ばれるようになり、現代に至る⁽⁷⁾。

精子の小人のイメージは、ハルトゼーガーが顕微鏡越しに発見したと考える以前から流布していた。むしろ彼はそうしたイメージを知っていたからこそ、観察対象に小人を見出したのだろう。そこで、ゲーテもよく知っていたパラケルススとスターンを例に取り⁽⁸⁾、精子の小人のイメージを押さえておこう。

フィリップ・テオファラストゥス・フォン・ホーエンハイム、通称パラケルスス（1493-1541 年）は『事物の自然について』（1572 年）の第一巻で、自然物の誕生を自然による場合と技術による場合に分け⁽⁹⁾、「一人の人間は経験豊かな錬金術師の技術と巧みのおかげで育ち生まれる」⁽¹⁰⁾と断言する。彼は人間の製造に成功したとも伝えられ、その方法を明瞭に記している。

男性の精液を密閉した瓶に入れて、馬の腹の最高度の腐敗によって 40 日間、あるいはそれと同程度の期間腐らせる。すると、それは生き活きとして、動き、活動し始め、目に見える物となる。この時期の後、それは少々人間に似てくるが、透明で、身体を持たない。これが日々人間の血の秘薬を賢明に供給され栄養を与えられ、そして 40 週目まで馬の腹と同じ温かさに保たれると、女性から生まれる他の子供と同様、正真正銘の

活き活きた人間の子供が五体満足で生まれる。だがずっと小さい。我々はこれをホムンクルスと名付け、その後、別の子供と変わらず、心を込めて熱心に養育しなければならない。そうするとこれは成年に達し悟性を持つようになる。これこそ神が死すべき罪深き人間に知らせる最高にして最大の秘密の一つである⁽¹¹⁾。

パラケルススによると、精子は子宮内で生育しなくとも、密閉した瓶の中で適度な状況に適切な期間置かれていれば、人間になるという。「馬の腹の最高度の腐敗」は腐りかけた馬糞を指し、瓶の中の精液を馬糞と共に腐らせることは、著書の冒頭で彼が「地上のあらゆる事物は腐敗の助けを得て自然から生まれる。すなわち腐敗は誕生の最高度にして始まりである。」⁽¹²⁾と述べたことを踏まえると、「誕生の始まり」を意味する。「腐敗 (Fäulnis)」は事物が湿った温かさの中で変化していくための環境であり、腐敗の先に誕生の可能性が見える。こうして精子は、腐敗した環境に40日置かれてホムンクルスの原型となり、その後は人間の胎児と同じ経過を辿る。胎児が40週間母胎から栄養を受け取って身体を作るのと同様、ホムンクルスの原型は人間の血を栄養にし、同じ期間で身体を形成して誕生する。誕生後も養育が必要なことと、成長して悟性を備えることは通常の人間と変わらない。人間とホムンクルスの違いは大きさにあり、それは誕生に至る過程が子宮内で行われるか密閉瓶内で行われるかに拠る。子宮は胎児の成長に従い大きくなるが、瓶の大きさは変わらないため、ホムンクルスは小さいままなのである。パラケルススのホムンクルスは、卵子や子宮を必要としない点で、精原説を証立てるものとなった。

18世紀イギリスの作家ローレンス・スターン (1713-1768年) は『トリス

トラム・シャンディ』(1759-67年)第一卷第二章で、主人公受胎の瞬間を描くための長い前口上の一環として、「精子の小人もわれわれと同じように、皮膚、毛髪、脂肪、肉、静脈、動脈、靭帯、神経、軟骨、骨、骨髄、脳、腺、生殖器、体液、関節、等をそなえ、一同程度の活動力をもった生き物であり、一また、言葉のあらゆる意味において、親愛なイギリス大法官閣下に劣らず、正真正銘のわれわれの同胞なのです。」⁽¹³⁾と述べる。ここでの精子の小人は、パラケルススの場合とは異なり、子宮の中で育ち、通常の大ささの人間トリストラム・シャンディになる。精子の小人は身体の各器官においても活動力においても成体の原型であり、「われわれの同胞」とさえ呼ばれて、一個の存在として丁重に扱われる。

ゲーテがこうした精子の小人のイメージを知らなかったはずはない。しかしながら『ファウスト』第二部に登場するホムンクルスは、伝統とは異なる19世紀に特有の性質を持つことになる。

3 ゲーテのホムンクルス—着想の経緯

『ファウスト』はゲーテの代表作として名高い悲劇である。第一部で老学者ファウストが悪魔メフィストフェレスと契約を交わして若返り、青春を満喫した後、第二部で時空間を飛び越えて様々なところへ赴き、数々の願望を叶えていく。ファウストのモデルは実在した学者ヨーハン・ゲオルグ・ファウスト(1480? - 1540?年)であり、ゲーテはファウスト博士の伝説として民衆本で流布したエピソード—悪魔メフィストフェレスとの契約、町娘への恋、ギリシアの美女ヘレナの呼び出し—を織り込んだ。第一部では悪魔との契約と町娘との恋が、第二部ではヘレナの呼び出しが描かれる。

ホームンクルスが登場する第二部第二幕は、第三幕でヘレナが登場する前段階にあたり、かつてファウストの弟子であったヴァーグナーがホームンクルスの製造に成功する前半部と、ファウストとメフィストフェレスがホームンクルスに導かれて古典的ヴァルブルギスの夜を訪れる後半部から成る。

ホームンクルスが『ファウスト』に初めて登場するのは、1826年11月10日付の草稿で、そこに「科学的小人 (ein chemisch Menschlein)」と記されることから⁽¹⁴⁾、デーリングは1816年から1826年の間にゲーテがこの着想を抱いたのだらうと推測する⁽¹⁵⁾。エッカーマンによれば、1829年12月16日の対話でゲーテは「ホームンクルス (Homunkulus)」の名で呼んでいたという⁽¹⁶⁾。ゲーテのホームンクルスが「科学的小人」から「ホームンクルス」へと名前を変えたのは、1826年から1829年にかけて尿素の人工合成という科学的大発見があったことと関係する。1828年、化学者フリードリヒ・ヴェーラー (1800-1882年) がシアン酸を研究中に、シアン酸銀を塩化アンモニウムと反応させたところ、偶然尿素の結晶を得た。彼が1828年2月22日に師匠のベルツェリウスに宛てた手紙に「尿素の人工合成は、無機物から有機物を合成する一例として観察することができませんか?」と記したように、この発見は有機物を無機物から作り出す、つまり生殖行為なしに新しい生命を作り出す可能性を示す。師匠のベルツェリウスは、3月7日付の返信で、錬金術におけるホームンクルス製造を連想すると答えて⁽¹⁷⁾、この発見の本質を突いた。有機化合物は生きている動植物の体内だけに存在する生命力の助けによって作られるという生氣説が広く行き渡る中、無機物から有機物である尿素の合成に成功したヴェーラーの発見は画期的であり、これ以降、生氣説は支持を失った。イエナの化学者デーブライナーは、ゲーテにこの成果を報せ、1828年8月にベルツェリウスを伴って三度ゲーテを訪問した⁽¹⁸⁾。ゲーテはベルツェリウス

との対話を通して、尿素の人工合成が無機物から有機物を合成するという前代未聞の出来事の意味をよく理解したのだろう。彼のホムンクルスは、伝統的な精子の小人の性質を捨てて、無機物から合成される有機物の結晶となる。

4 三人の子供たち

ゲーテのホムンクルスは作品内で誕生して自ら消え去る。その特徴を捉えるため、『ファウスト』に登場して亡くなる二人の子供、第一部のファウストと町娘マルガレーテの子供と第二部第三幕のファウストとヘレナの子供オイフォーリオンと比較しよう。マルガレーテの子供は母一人の元に生まれ、ファウストを生物学上の父とするが、社会的に認められる父を持たない。ホムンクルスはヴァーグナーという父の手で生まれ、フラスコ内で育てており、母を持たない。オイフォーリオンはファウストとヘレナの子供として両親を持ち、絵に描いたような幸せを体現する。三者はそれぞれ、前成説における成体の原型を卵子、精子、受精卵に見る分類に合致するとも言える。

第一部でファウストは町娘マルガレーテとの恋を楽しみ、彼女は妊娠する。ファウストは、メフィストフェレスの助けにより、恋路の邪魔になる彼女の母親と兄を殺した後、行方をくらませており、その間、マルガレーテは子供を産み、その子供を殺した罪で牢獄に入れられた。ファウストと町娘の恋には、ゲーテのシュトラースブルク大学時代の恋愛体験（1771年）や彼が新米弁護士となった当時フランクフルトで処刑された嬰兒殺しの女の供述（1772年）が反映しており⁽¹⁹⁾、貧しく孤独な未婚の母の悲劇に力点が置かれるため、殺された子供に注目されることはほとんどない。この子供は表に出てこない不在の存在であり、ファウストは、処刑の朝を待つマルガレーテの口から遅

ればせに自分の子どもが存在したことを知る。

マルガレーテ：私はお母さんを殺しましたし、

子供を溺死させました。

あの子はあなたと私が授かったのではないかしら？

(4507-4509)

彼女は間近に迫った死を恐れて正気を失っているが、自分が母親と子供を殺したことを自覚し、子供を溺死させたとファウストに告白する。このときのファウストはマルガレーテを脱獄させようと急いでいて、彼女が一人で子供を産み、困窮のあまり子供を殺したこと、そして自分に子供がいたことにまで考えが至らない。しかし彼女はファウストも子供を「授かった／贈られた (geschenkt)」のだと言い、不在の子供がファウストにとって贈り物であることを指し示す。彼にとって、一度も会うこともなく、考える対象にさえならない子供がどのような贈り物になりうるのか。

マルガレーテ：急いで！急いで！

あなたの可哀想な子供を助けて！

あちらへ！道をまっすぐ

小川沿いに、

橋を渡って、

森の中へ、

左手に渡り板のある、

池の中。

すぐに捉まえてあげて！
 あの子、浮かび上がろうとしている。
 まだ手足をばたつかせている！
 助けて！助けて！（4551-4562）

マルガレーテはファウストからの脱獄の誘いに肯んぜず、町の外に広がる森の中の池が子供の殺害場所であると示し、子供を助けて欲しいと繰り返す。溺死という言葉は母親が盥の中で子供を溺れさせた光景を連想させるが、マルガレーテの言葉からは、彼女が子供を池に落とした後、子供がもがく様を眺めていた光景が浮かび上がる⁽²⁰⁾。子供が池で溺れ死ぬのは、身体ごと水に解消することでもあり、それは後にホムンクルスが海の中へ解消するのと同じである。このことから、ホムンクルスが高い次元を目指したのと同様、マルガレーテの子供は「浮かび上がろうとして」、「手足をばたつかせ」、溺れ死ぬことによって、第二部でファウストが踏み込む大規模な世界への入り口を開いたとも考えられる。その点で、不在の子供はファウストへの贈り物と言えるだろう。

第二部第三幕でファウストとヘレナの子供として登場するオイフォーリオンは、マルガレーテの子供が哀しい短い人生を送ったのとは対照的に、周囲から大切にされる。ファウストは彼を「大事な息子」（9722）と呼び、ヘレナと共に三人の「優美な結びつき」（9883）を維持しようと努めるが、オイフォーリオンは両親の忠告に耳を貸さない。三人の関係を寓意的に捉えるならば、ファウストが現実、ヘレナが美を体現し、二人の出会いから「聖なる詩」（9863）であるオイフォーリオンが生まれた⁽²¹⁾となり、詩はその性質ゆえに高いところへ飛翔しようとする。

オイフォーリオン：もっと高く昇らずにはいられない、
もっと広く見ずにはいられない。
僕は今、自分がどこにいるか知っている！
島の真ん中、
ペロプスの陸の真ん中、
大地にも海にも近いところ。(9821-9826)

彼は、両親と一緒に安全な場所から「もっと高く」昇り、「もっと広く」見たいと言って、外の世界へ出て行こうとする。第一部の「天上の序曲」で神がファウストを褒める際に「人間は求め続ける限り、間違えるものだ」(317)と言ったように、ファウストは「求め続ける (streben)」人間であり、息子のオイフォーリオンもその性質を受け継いでいる。ゲーテが1829年12月20日のエッカーマンとの対話で「どんな時間にも、どんな空間にも、どんな人間にも、いっさい束縛をうけない詩的なものが、彼の中に擬人化されている」⁽²²⁾と述べたように、オイフォーリオンは時間や空間、家族といった制約から解放放たれて、高次の世界を目指す。「ペロプスの陸の真ん中」とは「ペロプスの島」であるペロポネソス半島を指し、彼らは今「大地にも海にも近いところ」、すなわち海に囲まれた大地にいる。オイフォーリオンがそこから「最も美しい星の輝き」(9865) となって空高く昇っていく姿は、四大元素に着目すると、地と水の領域から火が風の中を通っていると言える。だがオイフォーリオンの試みは失敗に終わる。

美しい若者が両親の足下に墜ちる。ある有名人の面影が死者に見て取れるようだ。だが身体的なものはすぐに消え失せ、光背が彗星のごとく天

へ昇っていき、衣装とコート、リラが残される。

ヘレナとファウスト：喜びのすぐ後に

悲痛な苦しみが続く。

地底からオイフォーリオンの声：お母さん、暗い国に僕を

ひとりぼっちにしないで！（間）

（9903-9906）

オイフォーリオンは、登場時には歌って踊る幼児だったが、墜落時には「美しい若者」となっており、その後、地底の「暗い国」から響く声から推察される彼は幼児に戻っている。一般に人間は「身体（Körper）」と「精神（Geist）」あるいは「肉体（Leib）」と「魂（Seele）」から成るのに対し、オイフォーリオンは「身体的なもの（das Körperliche）」と「光背（die Aureole）」⁽²³⁾から成り、変貌自在な点でも、通常の間とは異なる⁽²⁴⁾。彼の「光背」が天へ昇った後、彼が地底の「暗い国（im düstern Reich）」において「ひとりぼっちにしないで」と母に嘆くのはどういうことなのか。第一幕の最後でファウストは「薄暗い廊下（Finstere Galerie）」を通過して「母たち」のいる根源空間へ行き、ヘレナの姿を見つけた。ここは「孤独（Einsamkeit）」に支配され、形象が存在する以前の無であり、ヘレナはここからファウストの元へやってきたのだった。オイフォーリオンがいる「暗い国」はおそらく「母たち」のところであり、彼は「孤独」に、「ひとりぼっち」になった。マルガレーテの子供とホムンクルスが水の元素へ解消したのに対し、オイフォーリオンは四大元素が存在する以前の時空間、すなわち無へ戻っており、オイフォーリオンは、本人の想定外であろうが、実はそれまでいた世界よりも根源的な次元に至ったのである。ちなみに死者となった彼に重なる「ある有名人」とはイギ

リスの詩人ジョージ・ゴードン・バイロン（1788-1824年）を指し⁽²⁵⁾、ここではゲーテによるバイロン哀悼が「聖なる詩」の死として描かれている。

ファウストの二人の子供のうち、マルガレーテの子供は、不在であることにより、近代ドイツの町から高次の世界を陰画的に浮かび上がらせ、ヘレナの子供オイフォーリオンは、古代ギリシア世界で高次の世界を志向し、それが根源的空間であることを示した。この二人の間にいるのがホムンクルスであり、彼は近代ドイツと古代ギリシアを、町娘マルガレーテと神話上の絶世の美女ヘレナを繋ぐ。三人の子供たちは、作品内で誕生してしばらくして亡くなるのだが、その短い生涯を通してファウストに高次の世界を垣間見せる役割を果たしている。

5 純粹知性の誕生

ホムンクルスは、従来精子の小人と見なされてきたが、この作品では、時空間を自在に往き来することにより、ファウストたちがいる世界より高次の世界を示す。ゲーテが無機物から有機物が成立するという同時代の科学的発見を組み込んだのは、ホムンクルスにこの役割に相応しい性質を持たせるためだったと考えられる。

ホムンクルスは第二部第二幕の実験の中で誕生する。実験を手がけるのはヴァーグナー、第一部の冒頭「夜」の幕でファウストの助手として登場した人物であるが、ここでは教授となって化学の実験に精を出している。ファウストが修めた学問、哲学、法学、医学、神学が中世的であるのとは対照的にヴァーグナーの学問は近代的であり、若きヴァーグナーが「勇敢な人間ならば自分に任された技術を良心的に精確に使いこなせば充分ではありません

か？」(1057-58) とファウストに述べた通り、彼は与えられた条件の中で最善を尽くして研究を進めた結果を手に入れようとしている。

ヴァーグナー：(これまで同様じっとフラスコを見て)

昇った、光った、嵩が増す。
 一瞬のうちに出来あがった。
 偉大な意図は初め馬鹿げて見える。
 だが我々は将来偶然を笑い飛ばそう。
 卓越した思考をする脳みそを
 将来も思想家が作ることだろう。
 (うっとりフラスコを観察しながら)
 ガラスは愛らしい激しさで鳴り始める。
 濁って、澄んだ。こうして生成するに違いない。
 華奢な姿で
 かわいい小人の生まれるのが見える。
 我々は何を、世界は今以上に何を望もうか？
 それというのも、秘密が明るみに出たからだ。
 この音に耳を傾けてごらん。
 音は声になり、言葉になる。

ホムンクルス：(フラスコの中でヴァーグナーに向かって)

さあて、お父さん！元気？冗談ではないよ。
 こっちに来て、私をお父さんの心臓に優しく押し当てて！
 でもあまりきつくしては駄目、ガラスが飛び散らないように。

それがこのものの特性というもの。

自然なものは宇宙にだってほとんど満足しないけれども
人工のものは閉じた空間を欲求する。

(メフィストフェレスに向かって)

それにしても、ならずもののいとこ殿、ここに
ちょうどよい瞬間にいらしたのですね？ありがとうございます。
います。

よき巡り合わせで私たちのところに来てくれました。

私は存在する以上、活動しなくてはなりません。

すぐにも仕事に掛かりたいです。

腕利きのあなたですから、手短に私を助けてください。

(6865-6890)

人間の成立はこれまで「秘密」であったが、ヴァーグナーはホムンクルスの生成によってこの「秘密」が明らかになったと喜ぶ。彼はフラスコ内の物質が結晶化して「かわいい小人」になる様子を口に出しながら観察する。彼によると、生殖行為による人間の成立は「偶然」に左右されるが、今後は自分のような「思想家」が技術を用いて人間を作り出すことができる。これは尿素の結晶が人工的に作り出されたという事実を反映しており、フラスコ内の物質は、精子や卵子、受精卵といった有機物ではなく、無機物であろうと推測される。どのようにして無機物から「卓越した思考をする脳みそ」を作り出したのか、ヴァーグナーは口にしないが、それは実験の積み重ねから彼には明らかなのだ。このホムンクルスは、パラケルススにおけるような養育されるべき未熟な存在ではなく、「卓越した思考をする脳みそ」であり、生まれ

るやいなや、音を出し、音が声になるとすぐに言葉を使いこなして、ヴァーグナーを父親と認めて挨拶する。ホムンクルスは、ヴァーグナーが自分の誕生を喜んでいと理解して、親が子を抱きしめるように、フラスコごと自分を抱きしめてと言う。その際、感激のあまりヴァーグナーがきつく抱きしめないよう戒めており、愛情表現も計算に入れている。彼は「人工のものは閉じた空間を欲求する」と言い、自らを「人工のもの」と見なして、自分にとって必須の「閉じた空間」をならしめるフラスコを大切に、ガラスが割れないよう注意する。それと対比される「自然なもの」の代表例はファウストやオイフォーリオンであり、彼らは「宇宙にだってほとんど満足しない」で高次のものを求め続ける。1826年の草稿段階のホムンクルスは誕生と同時にフラスコから飛び出した⁽²⁶⁾。それは彼が「自然なもの」の性質を帯びていたためであるが、完成稿のホムンクルスは完全に「人工的なもの」となり、フラスコを自分の居場所として自覚する。とはいえ、フラスコ内のホムンクルスは有袋動物の赤ん坊が母の袋の中にあるようなもので、いずれここから出て行く必要がある。

ホムンクルスは自分を生み出したヴァーグナーを労るとすぐにメフィストフェレスの方を向く。彼にとってヴァーグナーの貢献は終わり、次に自分に役立つ相手はメフィストフェレスだからである。彼はメフィストフェレスを「いとこ殿 (Herr Vetter)」と呼ぶ。ここで初対面の悪魔を「いとこ」と呼ぶ理由は二つ考えられる。一つめは、両者は人間ではないが人間に近い存在として似ているためである。ゲーテは1829年12月16日に第二幕を朗読して、「ホムンクルスのような霊的な存在は、完全に人間化していても、まだまだふさぎこんだり偏狭固陋になったりはしていないので、デーモンの中に数えられてもいいのだ。その点で、両者には、一種の親類関係があるのだな。」⁽²⁷⁾と述

べた。ただし、ゲーテは悪魔メフィストフェレスが否定的存在なのに対し、ホムンクルスは活動的な肯定的存在であると説明を加える。それはたとえば、メフィストフェレスによるマルガレーテの家族殺しが否定的働きなのに対し、ホムンクルスがヘレナを連れてきてファウストに家族を作る肯定的な働きを成したことに見て取れる。二つ目は、名付け親の意味で「いとこ」という語を使う用例があるためである⁽²⁸⁾。名付け親は名付け子の誕生に立ち会い、名前をつけ、その子の教育に配慮するため、ここでホムンクルスがメフィストフェレスに助力を求めるのは不自然でない。

ホムンクルスは「卓越した思考をする脳みそ」、いわば純粹知性にして、ゲーテの表現によると「デーモン」であり、通常の間人とはだいぶ異なる。ホムンクルスは無機物から成り立つため、親子間の情愛や成人するまでの長い養育期間を必要とせず、すぐに仕事に取りかかりたいと言う。そもそもメフィストフェレスがホムンクルスのところにやってきたのは、ヘレナを探したいというファウストの願いを叶えるべく、ホムンクルスに案内を頼むつもりだったからである。こうしてホムンクルスの最初の仕事はヘレナ探しとなり、彼は隣室で眠るファウストの夢—レダが白鳥に変身したゼウスと契ってヘレナを受胎する場面—を見て賛嘆する。この透視能力に関して、シュトリヒが「ホムンクルスはあらゆる人間にとって普段は知る術もない秘密の隠されたことをすべて知っている。」⁽²⁹⁾と述べる通り、彼は他人の夢を見通すことができる。彼は「歴史的なものを無時間的見地から見渡し、法則を察知し、それに従って過去を、同じ情勢のまま、魔術的に呼び覚まして」⁽³⁰⁾、どの時空間にも自在に往き来する。彼は今回ファウスト一行を古典的ヴァルプルギスの夜へ連れて行く。それは紀元前48年8月8日のファルサロスという町である。この日時が具体的なのは、この地で翌日、古代ローマが共和制から帝

政へ変わる転換点になる、カエサルがポンペイウスに勝利する戦いが行われるからである。柴田氏が「それは毎年8月8日の夜に巡ってくる祝祭でありながら、同時に毎年のように、あの西暦前48年の決戦前夜の夜そのものでもあります。そこでは、通常の直線的な歴史的時間が循環する宇宙的時間の中へ溶け込んでいるのです。」⁽³¹⁾と述べるように、ホムンクルスの導きにより、ファウスト一行はヴァーグナーの研究室からギリシアへと空間を、近代から紀元前へと時間を移動して、祝祭に参加する。そこでは政治だけでなく、ファウストやホムンクルスといった個的存在が変革する予感に満ちている。

6 水か、火か、あるいは両方

ホムンクルスは古典的ヴァルブルグスの夜を巡っているうちに、論争中の哲学者たちアナクサゴラス（BC.500年頃-428年頃）とタレス（BC580年頃活躍）を見つけて、彼らの説に耳を傾ける。二人の哲学者は生きていた時代が異なり論争するはずもないのだが、特別な時空間となったこの夜、二人は論じ合う。アナクサゴラスが「この岩崖は火によって生じる」（7855）と言うのに対して、タレスは「湿り気の中で生き物は誕生する」（7856）と言い返し、二人の議論は終わらない。自然哲学者たちの議論の背景には、19世紀における火成説と水成説の対立がある。岩石の生成に関する議論において当初優勢だったのは水成説であり、すべての岩石は海の中で析出・沈殿してできたか、二次的に堆積したものであると考えられ、18世紀後半に理論の確立を見た。しかしながら18世紀末にイギリスの地質学者ジェームズ・ハットン（1726-1797年）が火成岩の生成過程を明らかにしたため、岩石の生成に地球内部の火や熱の役割を重視する火成説が有力になり、これが近代地質学の理

論的基盤になった⁽³²⁾。ゲートは水成説から火成説へ移り変わる過渡期に生きていたのだが、水成説を捨てがたかったのであろう、ここでホムンクルスはタレスに軍配を挙げる。

ホムンクルスは、フラスコから出て身体を獲得する方法を求めて、タレスに従い、海神プロテウスのところに行く。

プロテウス：(驚歎して)

輝く小人！未だかつて見たことがない！

タレス：こちらは助言を求め、誕生したがついています。

本人から私が聞いたところ、彼は
誠に奇妙にも半分しかこの世に出ていません。
精神的特性が足りないのではなく、
むしろ有能さは有り余るほどです。
今までガラスだけが彼に重みを与えています。
だが彼はすぐにでも身体を持ちたいのです。

プロテウス：おぬしは真に処女の息子。

おぬしは存在すべき前に既に存在している！

タレス：(小声で)

別の側から批判的に私に見えますことに
彼は両性具有と思われる。

プロテウス：では、その方がずっとよい。

彼の望みは上手く達するだろう。
だがここではそれほど思案しなくてよい。
広い海で始めねばならない！

そこでまず小さく始め、
 最も小さいものを飲み込むことを喜ぶ。
 そのようにして次第に大きくなって
 自らを作り上げて高次の成就に至るのだ。(8245-8264)

プロテウスが「輝く小人」と表現するように、ホムンクルスというフラスコ内の結晶は発光性である。今のところ、ホムンクルスはまだ「半分しかこの世に出していない」。フラスコのガラスが「身体」の代わりとなり、彼の「精神的特性」や「有能さ」といった純粋知性が雲散霧消しないように、ある種の制限を、「重み」を与えているのだが、彼は「存在すべき前に既に存在している」というこの中途半端な状態を解消すべく、身体の獲得を目指す。ホムンクルスの光は、身体を獲得したいという「高次の姿への憧れ」⁽³³⁾の現れなのである。ここでプロテウスがホムンクルスを「真に処女の息子」と表現したのは、ホムンクルスが生殖行為なくして誕生したことを暗示する一方で、彼が生みの父しか持たないという事実と合わない。むしろこの表現は、人工的に成立した存在が父や母といった血縁上の親および生殖行為と無縁であることを示し、タレスが密かにホムンクルスは「両性具有」であると告げるきっかけになる。ホムンクルスが両性具有であることに関して、彼が男性か女性のどちらかの性をまだ選べない子供であることを示すという説⁽³⁴⁾がある。これに加えて、創世記においてアダムとエヴァという男女が生じる前のアダムは両性具有のアダム・カドモンと呼ばれたことと、プラトンの『饗宴』で二つの頭部に四本の手足を持つ両性具有の球体人間がいたことを考え合わせると、ホムンクルスは原初の人間を両性具有と見なす伝統を受け継いでおり、両性に分裂する前の段階にあると言える。それは彼が「存在すべき前に既に

存在している」と呼ばれることにも重なり、彼は二分法で分類できない境界的存在なのである。プロテウスが両性具有の方がずっとよいと言ったのは、ホムンクルスが境界的存在であるために原初の状態に戻りやすいからである。プロテウスはホムンクルスが身体を獲得するために「広い海で始めねばならない！」と言う。その言葉の背後には、水において「身体／物体 (Körper)」が生成するという水成論があり、ホムンクルスが小さく始めて大きくなるには、現在の発光する結晶を解体して、「広い海」の中で分子に戻り、新たな物質と組み合わせさせて「身体／物体」を作り上げ、様々な形態を取って進化していく必要がある。

こうしてホムンクルスは水に同化せよという助言に従い、海に入っていく。

ホムンクルス：この優美な湿り気の中で

私がここで照らすものは

すべて魅力的で美しい。

プロテウス：この生命の湿り気の中で

おぬしの光が初めて

壮麗な音をたてて輝く。

ネレウス：群れの真ん中で何という新しい秘密が

我々に明らかにされることか？

ガラテアの足下の貝の回りで何が燃えているのか？

力強いかと思えば愛らしく甘美に燃える、

あたかも愛の脈拍を打つかのようではないか？

タレス：あれはホムンクルス。プロテウスに誘われて・・・

素晴らしい憧れの徴候。

私には不安に響めく痛みが感じられる。

彼は光輝く王冠にぶつかって砕けるだろう。

ほら燃えている、きらっと光る、ああ流れ出した。

シレーネ：何という炎の奇跡が我々に、火花を出して互いに砕ける波を、

明るくするのか？

そのように輝き、揺らめき、照らし出す。

身体は、それらは夜の間赤々と燃え、

まわりのすべては炎に取り囲まれる。

すべてを始めるエロスよ、このように支配してください。

海万歳！大波万歳！

聖なる炎に取り囲まれて。

水万歳！炎万歳！

たぐいまれな冒険万歳！（8458-8479）

ここで、ホムンクルスが海を「優美な湿り気（Feuchte）」と表現する点に着目したい。それというのも、「湿り気」という語は、パラケルススが生命の誕生に必須の「腐敗」の根本は「湿った温かさ（eine feuchte Wärme）」にあるとした二つの要素、「湿り気（Feuchtigkeit）」と「温かさ（Wärme）」を彷彿とさせ⁽³⁵⁾、パラケルススが掲げるこの対は水と火の対に重なるからである。海の中で輝くホムンクルスは、水の中における火として、岩石の生成に関するタレスとアナクサゴラスの二つの説、水成説と火成説を総合する。ホムンクルスは身体獲得を夢見てますます輝きを増しており、自分の光が照らし出すものが「すべて魅力的で美しい」と認識した後、自らフラスコガラスを割り、輝きながら海へ流れ出す。その様子は、「燃える（flammen）」（8473）、

「きらっと光る (blitzen)」(ebd.)、「火花を出す (funkeln)」(8475)「輝く (leuchten)」(8476)、「明るくする (hellen)」(ebd.)、「赤々と燃える (glühen)」(8477)、「炎に取り囲まれる (vom Feuer umronnen)」(8478)と火に関する語で彩られる。エムリッヒによると、初稿でホムンクルスがガラスを割った後小人として現れたのはパラケルススの伝統に従うのに対し、完成稿で炎となって流れ出るのはゲーテの独創であり、ゲーテが度々造形する「導き手としての少年 (Knaben Lenker)」が手にする炎に共通する⁽³⁶⁾。ホムンクルスの炎が、完全な形で誕生したいという憧れを燃料として、周囲の者たちを導く炬火であるならば、彼は何を知らしめるのか。ネレウスが「新しい秘密が我々の目に明らかにされる」と述べるように、それは生命の誕生という秘密である。ホムンクルスはフラスコ内で無機物が結晶した結果であり、優れた知性を持ちながら、身体を欠くために、「半分しかこの世に出ていない」。彼は、純粋知性の性質ゆえ時間を超えた無時間的存在であるが、「身体／物体」は時間の枠内に存在するため、それを獲得するには時間の範疇に入る必要がある。そのためには、「不安に響めく痛み」があろうとも、彼は自分を取り囲むガラスを砕かなくてはならない。このように彼が「すべてを始める」様は「エロス」と呼ばれる。エロスという語は、プラトンの『饗宴』におけるディオティマの話をも、エロスとは欠如する善と美への獲得衝動に発する地上的な営みであるとする話を連想させる。ホムンクルスが自分に足りない身体を獲得しようとする衝動は、善や美といった高次のものを目指すエロスの動きと重なるのである。彼はガラスを割り自らの炎を水に合一させることにより、水と火を総合する生成の原理を示し、水成論と火成論の対立を止揚する。そうして湧き起こる「水万歳！炎万歳！」という合唱の中、ホムンクルスの「たぐいまれな冒険」が始まる。

ホムンクルスは身体を獲得できるのだろうか。プロテウスの教えが正しければ、彼は何千年もの歳月を水の中で過ごして、様々な「身体／物体」と結びついたり離れたりしながら、自らを形成して身体を持つだろう。ただし、ホムンクルスの冒険が紀元前 48 年 8 月 8 日のファルサロスで始まる点も考慮しなくてはならない。彼の冒険は、悠久の時間の中で進行すると同時に、毎年 8 月 8 日が来る度に新たに始まり、その都度、ホムンクルスに関心を持つ者たちに生命誕生の秘密を仄めかす。それは、日々発展する科学技術の一つ一つの成果に相当するのかもしれない。

注

- (1) オウイディウス（中村善也訳）：変身物語（上）、岩波文庫、1981、14 ページ参照。
- (2) オウイディウス（中村善也訳）：変身物語（下）、岩波文庫、1981、73-77 ページ参照。
- (3) Vgl. Hans Ludwig Held: Das Gespenst des Golem. München. 1927. S.68.
- (4) Vgl. Held: A.a.O., S.114ff.
- (5) Goethe: Faust. Der Tragödie erster und zweiter Teil, Urfaust. Herausgegeben und kommentiert von Erich Trunz. München. 1999. 以下、本書からの引用は行数を記す。
- (6) 平凡社 DVD-ROM 世界大百科事典・便覧・年鑑、「前成説」、「後成説」、「発生学」の項を参照。
- (7) クララ・ピントーコレイア（佐藤恵子訳）：イヴの卵 卵子と精子と前成説、白揚社、2003。215-216 ページ参照。
- (8) ゲーテはツェルターに宛てた 1830 年 10 月 5 日付けの手紙で『トリストラム・シャーンディ』に言及している。Vgl. Kathleen R. Snow: Homunculus in Paracelsus, Tristram Shandy, and Faust. In: Journal of English and Germanic philology. 79. 1980. S.67-74. Hier S.70.
- (9) Paracelsus Sämtliche Werke III. Eick. 1993. S.221.
- (10) Paracelsus: A.a.O., S.223.
- (11) Paracelsus: A.a.O., S.226f.
- (12) Paracelsus: A.a.O., S.221f.

- (13) ローレンス・スターン（朱牟田夏雄訳）：トリストラム・シャンディ（上）、岩波文庫、1990、36-37 ページ。
- (14) Vgl. Goethe Sämtliche Werke. Faust Kommentare von Albrecht Schöne. Frankfurt am Main 1999. S.505.
- (15) Vgl. Hellmut Döring: Homunculus. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft, Ästhetik und Kulturwissenschaften. 11. 1965. S.185-194. Hier S.185f.
- (16) Vgl. Faust Kommentare. S.513.
- (17) Vgl. Faust Kommentare. S.506f.
- (18) Vgl. Faust Kommentare. S.507.
- (19) 柴田翔：ゲーテ「ファウスト」を読む、岩波書店、1985、153-161 ページ参照。
- (20) ゲーテの『親和力』（1809年）でも、赤ん坊が池でボートから落ちて溺死するが、こちらは事故と見なされ、赤ん坊を池に落とした娘オットーリエは非難されない。
- (21) 柴田翔：「ファウスト第Ⅱ部」を読む、白水社、1998、131 ページ参照。
- (22) エッカーマン（山下肇訳）：ゲーテとの対話（中）、岩波文庫、1993、149 ページ。
- (23) 「光背」は聖像の全身を包む光を指す語で、オイフォーリオンが人間ではないことを示している。
- (24) ホムンクルスとオイフォーリオンは、登場するやいなや「冗談（Scherz）」（6879/9696）という言葉を出し、ホムンクルスは炎を燃やし、オイフォーリオンは輝きとなって天に昇っており、火の元素と関係する。両者の共通点について Vgl. Snow: a.a.O., S.74.
- (25) エッカーマンによると、ゲーテはバイロン卿を高く評価していた。Vgl. Faust Kommentare. S.630.
- (26) Vgl. Döring: A.a.O., S.187.
- (27) エッカーマン：上掲書、142 ページ。
- (28) Vgl. Faust Kommentare. S.513.
- (29) Fritz Strich: Homunculus. In: Kunst und Leben: Vorträge und Abhandlungen zur deutschen Literatur. 1960. S.59-76. Hier S.76.
- (30) Wilhelm Emrich: Die Symbolik von Faust II, Sinn und Vorformen. Bonn. 1957. S.233.
- (31) 柴田翔：「ファウスト第Ⅱ部」を読む、61 ページ。
- (32) 平凡社 DVD-ROM 世界大百科事典・便覧・年鑑、「火成説」、「水成説」、「ハットン」の項を参照。

- (33) Rudolf Georg Bindung: Mephistopheles und Homunculus. In: Goethe-Kalender. 1938. S.47-62. Hier S.61.
- (34) Vgl. Faust Kommentare. S.570.
- (35) Vgl. Paracelsus: A.a.O., S.222.
- (36) Vgl. Emrich: A.a.O., S.252f.